

巻頭言

認知症を地域で支える
(プライベートネットワーク論考)

中道 和久

(元津医療生協勤務・三重短大等非常勤講師・研究センター三重のつどい世話人)

2004年12月、それまで「痴呆」呼ばれていたこの病気は「認知症」と呼ばれるようになりました。昨年の統計では、65歳以上の高齢者人口は2,980万人。認知症高齢者は約270万人と言われており、65歳以上の高齢者の10%との推計もある。現在のところ、進行を遅らせたり、「周辺」症状を軽減させたりする薬はあるものの、「治せる」薬の実用化にはいたっていません。したがって、在宅や施設など生活の場での看護や介護が引き続き重要になっています。



私と認知症の付き合いは、十数年前の母の認知症発症からですが、この間の、認知症の治療や看護・介護、あるいは認識は大きく変化してきました。

私は、認知症には地域を変える（21世紀の要の病気）かもしれない可能性が、秘められている病気ではないかという「一縷の希」を持っています。このことだけを聞けば、「何を馬鹿な」と言われるかもしれませんが。介護の辛さ深刻さをどう考えているのかと言われるかもしれませんが。しかし、だからこそ、今までの、認知症の治療や看護、介護を見直して、新しい介護のあり方を作り出していくところにこそ、認知症介護の新しい姿と可能性がある気がしてなりません。

認知症は病気です。脳の器質障害から来る機能障害。そこで一番辛いのは、やはり病気の人である本人その人であると考えています。家族も、辛さ苦しさは本人と同等か、あるいは本人以上と考えるかもしれません。病人の気持ちや言動が理解できないために、本人以上に辛くなるのはよくわかります。

認知症の特徴として、「親しい人・心許せる人」にその症状が集中的に出ることが言われています。また、「輝いていた時代」に戻ることもこの病気の特徴です。また、その病気の原因によって、症状の出方にも特徴があります。アルツハイマー型や、脳血管型では、比較的長期間、在宅で、住み慣れた地域での生活が可能である場合が多くあります。地域での生活の継続が、病気の進行をゆっくりにしたり、周辺症状の発現の緩和につながる場合をいくつか経験しています。

その場合共通しているのは、「地域でみる」という発想です。つまり、介護保険などの社会資源（ソーシャルネットワーク）を活用しながら、その人と家族のつながり（プライベートネットワーク）に依拠していることです。私も長年、ケアマネジャーや、在宅介護支援センターの相談員などを経験してきましたが、仕事柄、経験的にソーシャルネットワークは比較的簡単に作れます。あるいは、半ば恒常的にできています。社会資源を使って援助することは半ば常識的に教えられ語られていますが、だからといって、決してうまくいくケースが多くないということに気がきました。

地域の人たちからも見守られ、家族も安心していられるケースは、プライベートネットワークを活用している場合でした。その人たちに、病人の情報を伝えて共有することで、家族の安心感（安堵感）は言うに及ばず、近隣の（ネットワーカーの）役割も作られ、少し大げさかもしれませんが、新しい地域の「再生」（創造）ツナガリがそこには出来ているのです。

プライベートネットワークの理解と活用は、各人・核家族、地域によって様々です。しかし、病気の人と家族を「点」として理解するのではなく、面であり生活のありようの実際に足して様々なつながりの中で、そのつながりを活用することを意識するなら、それは、認知症の人と家族、そして地域にとっても新しい可能性を開いていると思います。



国際協同組合年記念企画

三重のつとめ

「きたるべき災害に備えて、

私たちがなすべき事とは」

開催

文責：伊藤小友美



3月24日に、44名の参加で「きたるべき災害に備えて、私たちがなすべき事とは～災害への備え、まちづくり、協同の役割を考える 東日本大震災から1年、今必要な事を経験から学ぶ～」をテーマに、三重のつとめを三重県文化センターで開催しました。三重県では、昨年9月に台風12号による大きな被害があり、相談会では、東日本大震災から1年ということもあり、協同の力で減災を考えたいと準備を重ねてきました。

冒頭、研究センター常任理事の山下隆之さんから「大規模な災害が起きたときは、消防や緊急車など『公助』はすぐに期待できない事が考えられます。自分で自分の身を守ること『自助』、近所や地域で守ること『共助』がとても大切になります。大震災や三重の水害などの取り組みからみえてきたことを共有しながら、協同の力を大切にしていくことはどういうことなのか、参加のみなさんと今日は考えたいと思います。つながること、集うこと、ネットワーク作りがいかに大切であるか、今後の中で深められればと思います。私たちにできることはなにか、地域の間関係が希薄になっているといわれている中、大切にしたいことを確認し、来る災害に向け準備できることを考えていきたいと考えます。つどうこと、つながることで見えてくること、地域で協同していくことを考えあいたいと思います。」との趣旨説明で、つとめは始まりました。



山下隆之さん

メインの学習は「巨大災害に備える」と題して三重大学大学院准教授の川口淳先生に講演をしていただきました。次に、①高齢者にやさしいまちづくりへの提起（みえ医療福祉生協専務理事：北村行史さん）②コープみえの台風被災者へのお見舞い活動（コープみえ：富山耕治さん）③ボランティア支援センターからの活動報告（みえ災害ボランティア支援センター長：山本康史さん）の事例報告がありました。その後グループごとに意見交流を行いました。

川口先生は、システム工学の中でも建築構造学・鉄骨構造学・合成構造学・耐震設計学などがご専門で、三重県防災会議・減災対策検討会議のメンバーでもいらっしゃいます。東日本大震災後、講演依頼が殺到し、たいへんお忙しい日々の中、研究者としての熱い思いを語ってくださいました。参加者一同、たいへんわかりやすい話に、自らのくらしを見直した一日となりました。ニュースでは、川口先生の講演の概要をご紹介します。（詳細な報告及び当日資料をご希望の方は、実費でおわけします。事務局までご一報ください。）

◆◆ はじめに ◆◆

去年の3・11があつてから一年経ちますが、3・11をしっかり私たちは目をそむけず見て、学べることは何か、まだ終わっていない3・11の災害に対して、で



きることは何かを考えなければいけないのですが、私は科学者のはしくれとしてみなさんにどうしても説明しないといけなことが1つあります。それは災害の想定というものであります。何故かという今回のマスコミの報道の中でいっぱい「想定外」という話が出てくるからです。想定外という話が何故一人歩きするのでしょうか。「想定外」と言うからには想定があるのですが、その想定は誰が何のために決めたのでしょうか。あまり議論せずに、「想定外」という言葉でくくって、何となく話をしています。工学者としては納得がいきません。何を想定としているのかを理解することから災害をとらえたいという話をします。

◆◆ 9・11同時多発テロ ◆◆

と言いながら、全然関係ない話から入ります。9・11のことです。2001年の同時多発テロの時、私はアメリカにいました。1年間アメリカの大学で教えていましたので、ビルディングがなぜ崩壊したかということ調査する構造的な委員会の末端にぶら下がって、事故調査をしていました。アメリカは偉いとは言いませんが、危機管理について、日本とアメリカの思想の違いをまざ

まざと見せつけられました。

最初に驚いたのは次のことです。世界貿易センタービルは、1971年にデザインして建てられた、当時世界で一番高いビルで、デザイナーは日系アメリカ人です。彼が1970年代の設計時に、オーナーに向かってこう言いました。「ニューヨークに世界一番高いビルを建てる。このビルディングはアメリカの繁栄の象徴です。未来永劫建っているために必要な設計をしないとイケない。その中のリスクとしては航空機だってぶつかるかもしれない。」と。オーナーは腰を抜かしました。当時、飛行機の衝突を想定するなんて聞いたこともありません。今でもそう、そんなことを想定してビルを建てません。新聞ネタになって、侃々諤々の議論をしました。飛行機の衝突をビルの設計の段階で考慮に入れるのか否か。ビルに飛行機がぶつかるのか。400mの高さはどんな高さになるのか、分かりますか。曇天の日には、雲の中です。飛行機が低く飛ぶ可能性はニューヨークではあります。実際に事故はあるかもしれません。みんなが納得し、彼が提案したのは、B707が着陸速度（失速ぎりぎり）で、燃料がなくて、ゆっくりと降りてくるという想定をして、ぶつかっても崩壊はしない設計をしようということでした。被害は受けますが、このところがリスクマネジメントの第一歩で、自分たちでリスクを定めるといことです。

後で計算をしたら、世界貿易センタービルのテロは想定定の9倍から16倍でした。ものすごい想定外です。結果として45分後と1時間後に完全倒壊しました。でも現場ではもっとすごいことが起きました。ぶつかった瞬間に、オーナーも設計者もニューヨーク市民もみんな潰れるということが分っているのです。完全倒壊を予想して最大2万5千の人が死傷するということをみんな覚悟しました。その覚悟を事故直後にして、その体勢で初動をしました。結果として亡くなったのは2千数百人、そのうちの3分の1が消防士です。潰れるという事が分かっているながら「行ってくるぜ」と言いながら突入した消防士が、2万人をビルから逃がしたのです。これがリスクマネジメントなのだと感じました。

◆◆ 阪神淡路大震災 ◆◆

国は公式的に、30年以内に巨大地震に見舞われるのは7割近い確率だと言っています。阪神地区の場合が、最も地震のリスクの高い場所のひとつでした。それは建築基準を見れば明らかです。建築基準は地震のリスクに応じたエリア分けをしています。最もリスクの高いのがエリア1です。フルに地震荷重をかけて設計をしなくてはならない場所です。東海地方も阪神もそうです。そういう想定をして、非常に高い確率で地震が起こる地域だという認識は国にはありました。

しかし、一般市民には認識はありませんでした。例えば神戸です。神戸のみなさんはおじいちゃんに、「神戸で生まれて80年経つが、ほとんど地震の経験がない」

と聞かされてきました。これは事実です。聞く方にはバイアス（※主に先入観や偏見を意味し、感想や意見をあらかじめ特定の方向に偏らせてしまう要素などを指す語）がかかります。減点して聞くのです。おじいちゃんが生きている間、地震がないという言葉は、地震がないといいなと思っている人は、神戸には地震がないと思っています。これがバイアスです。

17年前の震災のとき、神戸市役所が潰れましたが、建築技術者はこのことを予期していました。賢明な方は1968年から分かっていた。1981年からは賢明でない方も分かっていた。何故ならば1968年には十勝沖地震が起きて、コンクリートで作った建物がたくさん潰れ、研究が始まったからです。研究の最中、78年に宮城沖地震が起き、また潰れました。いよいよまずいと3年後の81年に建築基準法が作り直されました。法律が変わったわけですから、役所でもそれより前に建てたのは駄目なのだと分かっていた。

◆◇ 潰れる家はわかっている ◇◇

結論をいうと神戸の震災は、工学的には思った通りの災害で、後から分かったのですが、思った通りにビルが潰れて、思った通りに人が亡くなりました。神戸の教訓で持って建築基準が作り直されたかということ、作り直されていません。今も同じです。三重県で、同じように潰れる家が何軒あるか分かっていますが、それを何故直さないのでしょうか。それは直す気にさせる人がいないからです。それから、みなさんが直す気になってもらう工夫を我々専門家がしてこなかったと思います。

三重県全体としてはだいたい耐震工事は終わりました。役所や小中学校の耐震化は、大体終わりました。「我が県は、全国トップファイブを誇っています」と言います。しかし問題は、1年は365日あって、役所が開いている時間は朝8時15分から午後5時15分まで、残りの時間はやっていないことです。小中学校の子供がいる時間は24時間のうち限られた時間で、しかも休日は1年のうち半分あります。ということは単純な計算で、役所や学校を耐震化しても、人の命が90%救われるということではないということです。何をしなければならぬかということ、自宅の耐震工事をしなければなりません。心を動かすために、プロがちゃんと、「あんた本当に死ぬよ」と言い、家が潰れる事がどんなにつらいか、町の中に住む責任をして心を込めて説かないとイケないと思います。

南の方の高齢過疎化地域に行きますと、「先生、わたしは今年で88歳。じいさんは10年前に死んだ。『家直せ』と言われてもどうしようもない。潔く死にますわ。」と言います。こういう人がたくさんいます。みなさん、どう説得しますか。町に住む責任を考えているでしょうか。死んでいいのなら、家の玄関に大きく「死んでいいシール」を貼ってください（笑い）。そうしないと、家が潰れたら、ご近所や消防は助けに行きます。助けに行

くと手間がかかります。隣の助かりたい人が死ぬかもしれません。そういう町の問題なのです。日本はいつしか、戦後の西洋文明が入ってきて、なんとなく個人主義で権利ばかり主張する文化にだんだん変わって、みんなで責任を果たしながら町に共に住む文化がなくなりつつあります。町に住むということは、自分の家が潰れて、他人に迷惑をかけない気持ちにならないといけないと思います。

東海・東南海・南海地震の建物の被害想定 (揺れによる被害)				
	建物棟数	全壊・消失	半壊	合計(%)
全県	1,395,623	80,150	92,277	172,427 (12.4%)
津市	201,292	14,531	16,489	31,020 (15.4%)

※三重県地域防災計画

◆◆ 津波の脅威 ◆◆

津波の高さを、みなさん、知っていますか。例えば、津の港で3mの津波が来るとすると、どうしますか。標高5mくらいのところまで逃げますか。津波の高さは標高とは関係ありません。3mの高さの津波は、津波到達時刻の、通常の何も無い海面の高さでプラス3mの高さです。もう一つの重要な点は、津波が万が一陸地に入ったら、堤防が壊れます。高さ3m津波だから標高3mという意味ではないことです。非常に入り江が小さい、南伊勢町みたいな、リアス式海岸なV字型の谷があるところに大きな水量で水が入ると、水の行き場がありませんのではね返されるわけですが、はね返されるころまでは行きます。動いてきたエネルギーが0になるところまで、高いところまで上って行きます。港に3mで来た津波が3倍くらいの高さに駆け上がります。リアス式海岸みたいな水の行き場がないところの被害が大きいことが問題です。

正確な高さで測られたのは少ないのですが、例えば大船渡では普段の海面の高さより11m高い津波が来たが、実際は最大の高さで30mを越えています。平均でも25mくらいが水に浸かりました。これが特徴です。平野部はだんだん高さが低くなるが、リアス式海岸のところは、特に注意が必要です。

もう一つ、今回の災害はどんな災害かということが、検死結果から分かります。阪神淡路大震災では、お亡くなりになった方の85%以上が、建物の損壊や家屋の転倒よっての圧死です。今回は溺死で、津波災害です。同じ地震で、建物にどんな影響があったのかは、建物が残っているところは分かりますが、津波で建物がなくなってしまったところは地震か津波なのかなかなかわかりません。津波が来るときの映像をみんなで見て、どれくらい建物被害があったか推測していますが、神戸ほどではありません。だから津波による災害です。住民の60歳以上の方の比率は3割くらいでしたが、亡くなった

方の60歳の比率はなんと65%でした。そして、液状化は、何も海岸を埋め立てたところだけでなく、田んぼ、畑を埋めたところも、液状化しました。山の中でも起きました。

さて、震災の現場に行ってみると分かった防災学的教訓があります。

もともと津波の危険性が指摘された地域で、うまく逃げられなかったところがありました。宮古市の想定図を見ると、白字に青の「ここまで」という看板がありました。津波が「ここまで」来ると想定していたのです。津波浸水地域と想定して、計算をしていました。行政が警告しているので、悪いことではないですが、三重県にも国道42号の先、大雨だと「ここから先は行けない」という看板があります。東北でも、まずまずの場所に立っていますが、看板を越えて被害があり、想定を超えた被害になっています。岩手県の行政のハザードマップは、明治三陸津波の想定を取り上げたものです。明治三陸津波よりひどいのがあったが、その想定をしていなかったと言います。「それが起こるとは限らない、信じてはいけません」と書いてあるのです。津波が駆け上がることも書いてはありますが。



◆◆ 防災マップ ◆◆

石巻市の防災マップは、あえて言いますが、「想定くそ食らえマップ」です。実は右端に米粒のような注意書きがあって、「国がやった、起こることではない」と書いてあります。この心境が分かりません。「起こることとは限らない」という注意書きはまず読みません。まず自分の家を探しますね。「家は浸からないな」それで終わりですね。「小学校、中学校は浸からないな、避難所として使えるな」までは見ます。それまでですね。まさに想定外だと言ひ逃れは出来ますが。石巻市は全滅で千人が亡くなりました。半分以上の責任は地図にあると思います。地図を配る効果、逆効果を考えないのでしょうか。なぜ配るか、簡単です。国の総務省が毎年都道府県に防災管理部にアンケートをします。「防災体制について知らせる。防災危機管理官を置いているか。運用規定はあるか。」などの100項目あるアンケートです。それで配るのです。作って配れというプレッシャーがあります。国の方は作成の補助金を出しています。自分のところで何千万円もかけて、新たなシミュレーションをすることはありません。県がやっていること、国がやっ

ていることを頂戴して、とにかく地図を作って配るわけです。出来た結果を吟味せずに。これを専門用語で役所仕事と言います（笑い）。本当はそこで、御用学者は一言わないといけない、どう市民に説明するかを言わないといけません。

◆◆ 真剣な対策を ◆◆

そういう思いで、吟味して、今は防災マップを作っています。四日市では、最近、配られました。見ましたか。とても工夫しました。「ここまで浸かる」ではなく、「ここまで逃げろ」という線が引いてあります。東松島と同じですね。東松島では想定しない地域も浸かりました。

例えば、三重県の平野部が全部浸かる地図を見せて、「ハイ、みなさん何とかしてくださいね」それで終わりではありません。それぞれに対策があります。最大級のことは1000年に1回かもしませんが、その策を示すのが大事です。それぞれに対応策が違うということをきちんと示していくことが必要という考え方があります。こういう考え方は、建築の設計にはずっとあります。日本での建物の寿命は100年くらいです。その間に1回起きるかどうかの災害に対しては、きっちり対応する設計をします。でも数百年に1回の地震に対しては機能しなくてもよくて、バタンと倒れないレベルになっていればよいという設計をしています。みなさんは、そんなことも知りませんよね。建築基準ギリギリよりも高いものも設定できるのです。一番低いレベルに合わせるの、価格が高いからです。みなさんが「まける、高い」と言うからです。

家屋が潰れるのは、耐震補強をしていない昭和62年より前の家です。耐震補強をした人は潰れません。耐震補強をしていない人は、少なくとも100万円くらいかけて直してください。とりあえず、2階に寝てください。三重県で12.4%がこうした家です。津市は15.4%です。最低なくさないといけない。そしてどれだけ人が出るか、実は分っています。罹災率は、三重県民の76.2%の想定です。それから鈴木知事が、マグニチュード9.0を想定しようとして書いた地図があります。津の市街地の図ですが、実は津市というのは、山は高いが他はまっ平らです。安濃川、岩田川など3本の川があり、特に岩田川沿いが低いエリアです。助かるためにはどこへ行くかと、地図を見るのが大切です。ここはぎりぎりセーフだということに見てはいけません。

◆◆ 我々がいまやるべきこと ◆◆

我々がやるべきことは、東日本大震災を受けて、日本再生です。日本をどうやって次の時代へつなぐか。行政の力と民間の力を活用していかなければなりません。重要なことは、三重を守ることです。東北と同じことをしてはいけません。東北の震災を無駄にしない。僕たちができる事を先回りしてやるのがとても大切です。災害サイクルということがあります。災害が起きたら、人命



救助を72時間以内に行い、生き残った人の生活支援をして、復興です。そして平常時に戻る、そしてまたドカンと災害が来る、このようにぐるぐる回ります。災害対策は、この後うまくやるために、今、何ができるか。離れた我々が考えること、ひとりひとりがやるべきこと、みんながやることと、行政がやることは、実は違うのです。要は、行政にしか出来ないことを行政がやるべきで、市民がやるべきことをやらなくていい、市民ができる事は市民がやる、市民同士がやることはネットワークでやるなどそれぞれがやるべきことをやっていくべきです。そういうことをしっかり考えてもらいたいと思います。

◆◆ 巨大災害に備える ◆◆

平成を振り返ると、平成2年には、雲仙普賢岳で地震があり、その次に奥尻島が津波にのまれて200人が亡くなりました。さらに数年後に阪神淡路大震災がありました。その後に広島、鳥取で地震があり、中越地震があり、福岡県で地震があり、能登で、中越沖、宮城で内陸地震があり、霧島連峰新燃岳（しんもえだけ）が噴火して、そして東日本大震災がありました。安政、宝永、慶長とそっくりです。残されているのは、西日本と東京です。平成のたった20数年間で11回、人が死んだ地震と火山爆発が起きています。どうやらそういう時代のようなのです。戦争という不幸な事故が我々の歴史を分断して危うい町を作ったかもしれません。今こそ、東北の教訓を生かし、次の世代にどんな国を残すかが問われています。日本人の知恵を取り戻してつないでいくことが、今を生きるものの使命だと思います。

みなさんも、そういうことをしっかり考えて、いろんなディスカッションをしてほしい。そうお願いして、私の話を終わります。

東北の教訓を三重で生かすには

- 住宅の安全性の強化は絶対
- 耐震補強・家具等の固定
- 徹底した避難意識と避難計画
- 一人一人の避難計画の立案・訓練
- 地域全体での避難計画のすりあわせ
- 課題の共有と解決（行政と調整）

第1回岐阜のつどい—岐阜を知ろう！つながろう！報告 文責 事務局：鈴木隆司 「あぼ兄（に）イの農小を訪ねて」・・・すごい人がいっぱい！！

岐阜の地域を知ろう！つながろう！をテーマに、4月18日第1回岐阜のつどい「中津川椈の湖農業小学校見学・交流会」を行いました。椈の湖の桜は満開のはずが、この日もまだ…つぼみでした。でも、あぼ兄（に）イはじめスタッフの皆さん、山内さん、小林さんその他沢山の人の人たちとあつく交流ができました。幸い天候にも恵まれ、春の一日、内容の濃い企画となりました。

【「岐阜のつどい」は、ひろい岐阜県には地域でいろいろがんばっている方が多くいるので、まずは、岐阜の研究センター会員が少人数でもよいから地域を知ることから始めようと地域を調査交流活動として始めた企画です。第2回つどいは、8月18日「石徹白の小水力発電と地域再生」見学交流会を計画しています。別途、案内チラシあり】



4月18日 第1回岐阜つどい

- ◆10:30 椈の湖農業小学校校長 安保洋勝さん、スタッフの皆さんと交流
→歴史、めざすもの、施設、畑の見学
- ◆ 12:00～ 椈の湖へ移動、昼食—御幣餅、そば（農小の畑で収穫）をいただく。
- ◆14:00 終了

↑★あぼ兄イ、スタッフと交流。↓★畑には子供たちの蒔いた野菜の芽が出ていた。↓★昼食—五平餅、そば



＝訪れた農小でびっくりしたこと＝

- 雑草のない、手入れの行き届いた畑の美しさ。
- パワーあふれるあぼ兄イだけではない、周りのスタッフの皆さんのパワーそして仲のよいこと。
- 農業小学校を卒業した子供たちとの交流が続いていること—第1回の卒業生がスタッフとして参加、運営に協力。経験して感じたことより、農業大学に進学。全国最年少野菜ソムリエ誕生など。

＝参加者から出された感想＝

「すごい元気なおっちゃん達！ここは同じ岐阜県？って感じでした。農業も音楽もいきいきとやっつてのける人間のすばらしさがあると思う。」

「子供たちに農業の姿、自然の大切さ野菜などの命の尊さ、どんな物でも手間をかけて大切にしないと育たないと感じてもらうのも大切だが、それを守る人がいることが良かった。」

「現地で見学できて良かった。生きる、命の大切さを伝えたい自分たちのできる事から始めたこの農小の取り組み。岐阜県の子供たち、大人たちの参加を望みます。」

「農小には地元の子供たちでなく都会（名古屋方面）の子供がほとんどと聞きました。農作業は地元の子供たちには珍しくないのかな。」「岐阜の子供たちも参加できるとよいね。」

「久しぶりに皆さんと一緒にできて楽しかった。椈の湖のお茶の時代からの付き合いです。そんなかわりを持った人も多かったと思う。」

「丘の上の校舎であぼ兄イと仲間と交流する中で、くらしのために心の支えとなるモノを生み出す恵那教育から、あぼ兄イ中心に、彼を支える仲間とともに喜び、苦しみ、そして疑問を出し合い、気軽に乗り越えていく、お互いの信頼関係が出来ていると思った。」

椈の湖農業小学校について—あぼ兄イのお話し

4月18日の見学・交流会に先立って、2月6日、懇談会であぼ兄イにお話を聞きました。

—好辛クラブ主宰 椈の湖農業小学校校長の安保洋勝さん

●農小の始まり—「フォークジャンボリーとか手作りの活動をしてきた。その延長での農業小学校の活動。今年で19期目になる。自分たちの力で椈の湖そばの土地2haの荒地を開墾して始めた。今で言う『食と農』の先どり、スローフード、郷土食とか言葉があとからついてきた。農業小学校のスローガン『たがやし、ひとなる』という言葉はこの地方の方言だと思っていたら、『ひとなる』という言葉は全国版だった。長崎の人が「ひとなる」という言葉をまだ日常的に使っているのかとびっくりされた。」

●農小の1年—めいきん生協のときに下仁田ネギを納めていたつながりから、参加者募集の案内をしている。多くは名古屋の都会の子供たちだそうです。「今は最初とは違う場所で、2haのうち畑



3月25日 入学式での校長挨拶

50aでやっている。小学校一番多いときは114人集まった。この農業小学校の昼ごはんが美味しいから、朝ごはんは食べずにくるという子どももいる。・4月には カブトムシの幼虫を確保するのが大変。田植えもおおごと、最初はこんな泥の中気持ち悪いといやがるがやっているうちに、楽しくなってくる。泥遊びは子どもにとって必要なこと。・8月は 椈の湖オートキャンプ場を借り切ってキャンプをする。豚の丸焼きが大好評。きれいな川があるので鱒つかみをして焼いて食べる。・9月は この地方の名物栗拾いを行う。おやつは栗きんとん。秋には サツマイモをやくのもするが、こどもが『まだか？まだか？』と芋をつついて焼けないので、今は子どもから遠く離れたところで焼い



木で補強した跡を示して道具の大切さのお話し

ている。」「案山子(カカシ)作りも楽しんでやっている。鳥を脅すより何より、人が寄ってきたくなるような案山子を作ろうと去年は50体くらいの案山子ができた。その光景を取った写真がJR東日本のカレンダーに載っている。また、農業小学校の写真は食農写真コンクールにも入選している。」

●「稲刈りでは、刃物を持たすのは危険だがやらせる。足踏み脱穀でやる。籾をつかってゴミを吹き飛ばす作業に子供たちはびっくりする。」

●「農業小学校は今西祐行さんの絵本を読んだことから始まった。有名なあぼ兄イの『ほら吹き大根』。堆肥をたっぷり入れたら5kgの大根ができた。ジャガイモが木になると思っていた親もいる。」

●農小のメンバー—「鎌田さんだけが、小学校の校長先生で、後は普通の百姓をやってきた地域の人たち。俳優の川津祐介さんも取



スタッフ紹介—皆さんボランティア

材に来て、土づくりをほめられた。土づくりをほめられることは、百姓にとって一番嬉しいこと。その川津さんが辛いものが好きということがきっかけになり『好辛クラブ』の活動がはじまった。唐辛子は 人間の接着剤になる。『辛い』という感覚は、老若男女みんな同じ。『殻をとかす』ことから親睦が深まる。」

★写真は 3月25日 農業小学校 入学式 取材時の様子
普通の学校のように「ああしなさい」「こうしなさい」という指示、指導はしないそうです。
子供は走り回って遊んでいました。





特集 協同っていいかも No.3

研究センターニュース100号・101号に引き続き、「協同っていいかも」特集です。会員から寄せられた思いをご紹介します。引き続き、みなさんの思いを紙面で交流しませんか。ニュースに対するご意見・ご要望もお寄せください。

協同っていいかも…

私 サーバントリーダー!!
 そう～ 縁の下の力持ちさ～♪
 ひとは文字通り支え、支えられて人となる。
 ひとりでは微力! そう～ のんびり過ごしていたら
 半分も実力を発揮しないで終わってしまう! かも…。
 でも共、仲間とふれあう事で、意見の違う人、苦手をフォローしてくれる人など様々な出会いの中で、お互いの意見を尊重しつつ、充分話し合う事で新たな答えを見出す事ができる。

地域の中で生かされて

私の生活の中心は実家の母の介護です。93歳で一人暮らしの母は週2日のデーサービス・週1時間のヘルパーさん、そして週3日間の私の助けで成り立っています。その他にも私が行かない日にご近所の方々が交代で食事を作って持ってきて下さったり「買い物に行くから何か買ってくるものはない?」と聞いてくださったり。

私が電車の駅を降り、実家までに会う人が「おばあちゃん、どう?」と声をかけてくれます。それと何より私の住んでいるところとの違いでは明らかに中学生以上と思われる若者が「こんにちは」と見知らぬ私に挨拶をしてくれることです。

フットワーク軽く

「ねこの手貸します! 困った時はおたがいさま」を合言葉に「楽しく子育てができ、年をとっても安心して暮らせる地域のお手伝い」を始めて3年。2009年は1359時間だった応援時間が2011年には3040時間となり、高齢者がおられる世帯や子育ての応援が増えました。その背景には市包括や居宅介護支援事業所、社会福祉協議会とのつながり、そして利用者・応援者さんのロコミの力が大きかったと思います。草取りや犬の散歩ゴミ出し、電話でのコンサートのチケット取り、会社の余興のスカート作りなどちょっと変わった応援もやってくださる応援者がいれば何でも受けています。

また、昨年度からは飛騨支所のある石浦町で月一回「ふれあいサロン」も行っていて、回を重ねるごとに地域の方とのつながりが深まるのを感じています。今

飯村 初美 (コープみえ)

そして互いの持てる力の相乗効果で道が開ける! 協同無くしては、人生そのものが成り立たない様な気がします。

これからも出会い、ふれあいを大切に「協同っていいかも!!」と思える様、時間の許す限り出向いて、自分らしく楽しい人生を生涯学習しながら歩んでいけたら良いなあ～と思います。

国際協同組合年、ステップアップにふさわしい年! 頑張りたいと思います。

堀 正子 (コープあいち)

私の住んでいる一宮でも小学生は挨拶をしてくれますが、(学校の指導によるものか)中学生は見知らぬおばさんになど挨拶はしてくれません。

ついこの間まで地域はみんな顔見知りで挨拶を交わし、助け合って暮らしていました。今プライバシーの問題から関わりたくない、関係ないと無関心をよそおう人が増えています。

人と関わることは大変な部分もありますが、仲間とともに協同で何かをするということは大きな喜びを生み出す力になります。私はこれからも地域の中でともに助け合い生きて行く努力を続けます。

村中美耶子(おたがいさまひだ)

年度は社協と協力して、石浦町以外の地域でもサロンを開催しています。

サロンをやっている思うことは、「食べることは元気の源」せっかく生協とのつながりがあるのだから、高齢世帯への食事の提供ができるといいなあと考えています。また、応援者の「お年寄りの応援に入る時に自信を持ちたい」との声を受け、今秋にはヘルパー研修を開催する予定です。

「どうしたらやれるのか?」智慧を出し合いますず動いてみる。これからもフットワーク軽く地域に出ていくことで、更におたがいさまの輪が広がっていくといいなと思っています。

INDEX	
巻頭言	認知症を地域で支える(プライベートネットワーク論考) 中道 和久 1
国際協同組合年記念企画	三重のつどい 開催 2-5
第1回岐阜のつどい	岐阜を知ろう! つながろう! 報告 6-7
特集	協同っていいかも No.3 8

2012年6月25日(偶数月25日発行)
 定価200円
 (税・送料込み。年会費には購読料が含まれています)
 発行 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター
 代表理事 川崎直巳
 〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39
 TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315
 E-mail AEL03416@nifty.com
 HP <http://www.tiiki-kvodo.net/>